

一方「兎」は新たに自分が「かみ得たもの」を全て投入して描いた作品だ

しかし、これが受け入れられるという自信はない……もしかすると落選……

だが逆に自分の行き方が認められさえすれば、特選だって取れる自信はある!

祖父で手堅く入選しておいて

それから「兎」で勝負するか……

これからの自分は新しい手法をさらに追求していくこと以外には考えられない

認められようが認められまいが俺の世界はこれなんだ!!

文展には「兎」だけを出品することに決めたのです

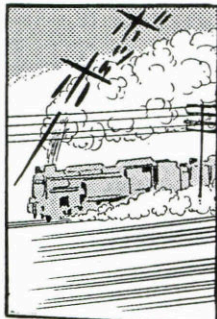
10月 第三回 文部省展覧会

「兎」は見事特選を獲得します

「兎」香月泰男 特

このとき泰男ははじめて絵描きとしての自分に確信を持ち、その普遍性を信じたのでした

国画会の大御所 梅原龍三郎先生や 福島繁太郎先生が「兎」気に入って俺に会いたいとおっしゃってるらしい



上京の折、同じ特選受賞者 庫田翠氏が両先生のところへ連れまわしてくれました

翌15年(1948年)3月 国画会第15回展 榎と壺「枯カンナ」入選 佐分賞も受賞

下関に帰ると泰男は、気持ち新たに画学にはげみます

これから先は自分の道をまっすぐに進むだけだ

新しい画風が認められ自信を得て、ますます仕事に油がのこりました

4月 長女慶子が生まれ私生活でも仕事でも万事が順調でした

しかしこの先、歴史の歯車は「一層」狂気と泥沼の時代へのめりこんでいく